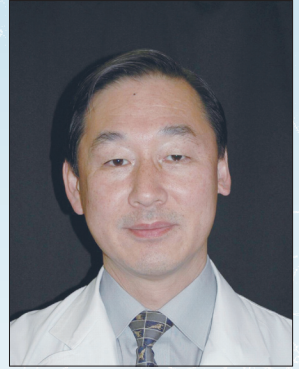




# 羅針盤



衛藤 光  
Hikaru Eto

聖路加国際病院皮膚科部長

## 口腔内科学は皮膚科医の専門領域である

読者の皆さんは患者を診察する際に、口腔粘膜をどれくらいご覧になるだろうか？ 歴史的にはヒポクラテスの昔から、医師は舌と爪を観察することを大切にしてきたはずだが、最近あまり口腔内をみる習慣はなくなってきたのではないだろうか。口腔病学(stomatology)は、20世紀前半までは専門性の高い医学領域とされてきた歴史があるが、現在欧米では主に歯科が関わる分野となってきた。口腔病学は耳鼻科、形成外科、口腔外科が関わる外科的疾患も多いが、全身性および皮膚疾患と関わる病変や心身症的背景による慢性疼痛症など皮膚科的、内科的素養と対処が必要な疾患も多い分野である。

最近、口腔診断内科や口腔内科など、歯科大学に内科的なアプローチを専門とする講座の設立が増加している。設立の理念は、歯科患者を口腔だけでなく全身各部の評価を行ったうえで、口腔全体の病変に対応しようとするものであり、そのための基礎になるのが口腔内科学(oral medicine)とされている。また歯科領域の日本口腔内科学研究会では、口渴や舌痛症に漢方的なアプローチを導入する試みが盛んである。

さて私達皮膚科医であるが、皮膚と連続して存在し、皮膚とよく似た病変が多い口腔粘膜は当然守備範囲と考えてきた。しかし振り返って考えると、あまり系統的なトレーニングや他科医師や患者へのアピールはしてこなかったように思う。成書には西山茂夫先生の優れた口腔

粘膜疾患アトラスがあるが、この領域を専門とする皮膚科医はあまりいないのが現状であろう。もちろん口腔粘膜疾患は皮膚科医が得意とする分野であり、その理由を列举すると、①主に皮膚に病変を生じる疾患が口腔粘膜にも生じること、②皮膚疾患の部分症状として口腔粘膜病変がみられる疾患が多いこと、③皮膚疾患を知らないと理解しにくい疾患が多いこと、④皮膚病理に精通していないと臨床像と合わせて正しい診断が困難な疾患が多いこと、⑤アレルギー検査や冷凍凝固療法など皮膚科学に精通していないとできない手技が多いこと、などがあげられる。

口腔粘膜疾患には、臨床と病理を総合的に判断できる皮膚科医だからこそ診断可能な症例も多い。内科的知識を備え、皮膚疾患に精通した皮膚科医が、口腔内科医として口腔粘膜も守備範囲とすることは当然のことであろう。

このような背景を踏まえ、この特集では皮膚科医が主治医として関わる可能性の高い疾患を、白い病変、黒い病変、腫瘍性病変、びらん・潰瘍の4つのカテゴリーに絞り、専門の先生方に執筆をお願いした。この特集を1冊読むことにより、日常診療で遭遇する口腔粘膜疾患の95%はカバーできると思う。

明日からは皮膚科医のあなたが口腔粘膜疾患に精通した口腔内科医として、口腔粘膜のトラブルに悩む患者さんに手を差し伸べていただければ望外の喜びである。